

男性支配的社会における女性間の友情物語

—— 角田光代『対岸の彼女』に見る女同士の絆

グアリーニ・レティツィア
(お茶の水女子大学大学院)

女同士の絆は、はかない関係と見なされることが多い。とりわけホモソーシャルな絆（非性的かつ、友愛のコードが適用される同性間の親密性）＝男同士の関係という印象が強いため、女同士の絆が不可視のもの、不可能なものとしてきた。その結果、男性間の友情物語と比べて女性間の友情物語が圧倒的に少ない。

日本現代文学において女同士の絆の可能性を探った作家として角田光代が挙げられる。角田の作品において母娘関係をはじめ、女同士の関係に焦点を当てたものが多い。『対岸の彼女』（2004）では、現在における小夜子と葵との関係と、葵の高校時代における友人魚子との関係、二つの物語を通じて作者が女同士の友情の可能性を模索している。本稿では、(1) 少女同士、(2) ママ友同士、(3) 負け犬対勝ち犬、それぞれの関係を中心に男性ホモソーシャル体制によって支持されている制度による女性の絆の制限の表象を探求し、その絆の可能性について論考を試みる。

キーワード

角田光代、女同士の友情、親密性、ホモソーシャルな絆、『対岸の彼女』

I. はじめに

現代日本における結婚、子育て、キャリアにまつわるジェンダー役割に伴う女性に対する期待、またそれらの役割によって女同士の間に生み出される深い溝を描くことが角田文学の特徴の一つである。子どもを産む（産める）女と産まない（産めない）女との対立を描いている『八日目の蝉』（2007）やママ友コミュニティにおける母親同士の競争を綴っている『森に眠る魚』

（2008）などがその一部の例である。第132回直木賞を受賞した『対岸の彼女』（2004）では、3歳児の母でありかつ専業主婦の小夜子と、独身で社長業を営む葵との関係を中心に、角田光代が女同士の友情の可能性を模索している。本作品は、奇数の章は仕事を通じた現在の小夜子と葵との関係に焦点化し、偶数の章は葵の過去、高校時代における友人魚子との関係に焦点化してお

り、章ごとに物語内容が入れ替わる、複層的な構造をもつ。この2つの物語を通じて作者は、女性の友情を描きながら男性ホモソーシャル体制によって支持されている制度がいかにして女同士の絆を妨げるかを明確にし、またその絆の可能性を提示する作品を生み出した。

東園子が指摘しているように、イヴ・コゾフスキー・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) の『男同士の絆』(1985=2001)以降、ホモソーシャルティ(非性的と見なされ、友愛のコードが適用される同性間の親密性) = 男同士の関係という印象がもたされ、女同士の絆が不可視のもの、不可能なものとしてきた(東 2015: 13)。東が説明しているように、男同士は非性的と認識される関係を結び、「その関係の中に権力を囲い込むことによって社会を支配する」(同: 27)。その男同士の輪の中に入れない女性たちは、男性と異性愛関係を結ぶことによってはじめて男性が持っている社会的資源に近づくことができる。このような男性支配的な社会は、男性と男性、女性と男性という2つの関係から構成される。言い換えると、男性支配的な社会に女性と女性の関係が存在しないのである。なぜなら、「男性支配的な社会は、女同士の関係を構成要素としない社会である」(同)からだ。それゆえに、女同士のホモソーシャルな絆と男同士のホモソーシャルな絆は物語化の度合いに違いがあり、女性間の友情物語よりも男性間の友情物語のほうが圧倒的に多い、と東は述べている。なぜなら、女同士の友情は男同士の友情に比べてコード化されていないからである。

その理由は、友愛のコードは男性支配を確立する手段であるため、非性的な公的領域での女同士の関係や男女間の関係を捕捉するためのコードを発達させると男性支配の妨げになりかねないからではないだろうか。男性支配社会は友愛のコードを男性が独占することによって支えられている。(同: 48-9)

もちろん、女同士の友情は社会の中に全く存在しないわけではない。ただし、男同士の友情と比べ「はかない」といった否定的イメージが強い。また、デボラ・チェンバース (Deborah Chambers) が指摘しているように、男性の友情と女性の友情の最も大きな違いは、その友情が権力に接近可能な資源であるかどうかという点にある (Chambers 2006=2015: 119)。

男性の友情と女性の友情のもっとも明確な違いは、友情が、経済的なものであれ社会的なものであれ文化的なものであれ、権力に接近可能な資源として用いられるかどうかと関係している。女性の友人ネットワークは彼女たちにとって不可欠な資源になっているが、一方で、女性が同性間の友情を男性のように権力への手段として利用できることはめったにない。「女性」というカテゴリーは権威性を欠くからだ。実際、女性の地位は慣習的に男性に依存し、男性の威厳によって承認を得る。(強調原文)

公的領域において男性と同じような形で

権力に接近することが妨げられている女性にとって、異性愛は社会的資源を獲得する手段であり、女同士のあいだで結ばれる関係は、たとえ強固かつ親密であっても、異性愛関係のほうが優位にあると認識される。アドリエヌ・リッチ (Adrienne Rich) が指摘しているように、男性支配的な社会において女性に異性愛が強制され、女性は女同士の関係をどんなに頼りにし、大事にしても、「男の信用度と身分のほうが上なのだ」と考える「二重思考」に陥る (Rich 1986=1989: 83)。東の言葉を借りると、「女性にとって他の女性との関係よりも男性との関係から得られる利益の方が大きければ、女同士の関係よりも男性との異性愛関係が優先されるだろう」(東 2015: 61)。

『対岸の彼女』において、以上のような制度を再生しながら女同士の絆を切断する女性を描くことによって、角田光代が強制的異性愛を伴う男性ホモソーシャル体制を批判し、それに伴うジェンダー規範の虚構性を問うきっかけを読者に与えている。先行研究では本作品における女同士の関係が既に指摘されている¹。しかし、女同士の絆を妨げる規制や、またその絆が可能となる過程については十分に論じられておらず、『対岸の彼女』における女同士の友情についても分析がなされていない。本稿では、

テキスト分析をもって1) 少女同士、2) ママ友、3) <勝ち犬> (結婚して子どもを産んでいる女性) と <負け犬> (未婚、子ナシ、三十代以上の女性)²、それぞれの関係に焦点を当てながら『対岸の彼女』における女同士のホモソーシャルな絆の可能性について論考を試みる。まず角田文学と少女小説との関係を明らかにし、葵の高校時代における友人魚子 (以下ナナコと表記) との関係を中心に少女同士の友情について論じる。次に、小夜子に焦点を絞りながらママ友コミュニティにおける女同士の関係を分析する。最後に、妻・母としての役割を重視する小夜子と独身・子ナシの葵との絆の可能性に焦点を当てる。このように葵の過去におけるナナコとの関係、また現在における小夜子と葵との関係、それぞれの物語の分析を通じて男性ホモソーシャル体制によって支持されている制度によって、女性の絆がいかに制限されているかを追究する。さらにその制度下において、女同士の絆の新たな可能性を探りたい。

Ⅱ. 友情の切望——『対岸の彼女』における少女同士の絆

葵とナナコの物語は1980年代に設定されていると考えられる³。いじめに遭っていた葵は神奈川から母の実家がある群馬に

1 矢澤美佐紀は、作家の意図はともかく、『対岸の彼女』が「結果的に<負け犬>論争を文学上で無化した」と述べている (矢澤 2007: 14)。また、上野千鶴子は、それまでにホモソーシャルな社会において成り立たないとされてきた女同士の友情を、角田の作品は「ミソジニーなしに描くことに成功している」と指摘している (上野 2010: 235)。

2 酒井順子 (2006: 8-9) を参照。

3 大杉重男が指摘しているように「作中の現在と発表時の時間が一致するとすれば、葵は2003年に35歳であり、葵が高校1年になった年は1984年ということになる」(大杉 2011: 146)。

引っ越し、転校した女子校でナナコと知り合い、親しくなる。クラスの中で出来上がったどのグループにも属していないナナコがいつかいじめの対象になるのではないかと危惧した葵は、毎日ナナコの隠れ場所である渡良瀬川を訪れ、ナナコと会うものの、ナナコの了解を得て校内では二人は接点を持たない。実際にナナコがいじめの対象となった高校2年生の夏に二人は伊豆にあるペンションでアルバイトすることになり、そこから帰らずに家出することを決し、ラブホテルを転々と移動し続ける。二人は昔葵が住んでいた横浜へ辿り着くが、しばらくそこに身を潜めた後に飛び降り自殺を試みる。死ななかった二人の逃避は「異常性愛ののちにたどりついた飛び降り心中」としてメディアで騒がれたあげく、葵は家族から監視されることになる。そのため葵はナナコの状況がわからなくなるが、葵の父が渡良瀬川で二人を会わせる。親戚が住んでいる町に引っ越すことになったナナコと葵は連絡を取り合うと約束するものの、再会せずに彼女らの物語は幕を閉じる。

テキスト分析に入る前に、作者角田光代と少女小説との関係から、『対岸の彼女』で描かれている少女同士の友情が少女小説と関連づけられる点をまずは押さえておきたい。角田が「自筆年譜」で記述しているように、1987年に小説書きを仕事にしようという決意を固めた際、角田は編集者に少女小説誌を紹介してもらった（角田 2005:

57）。そこで彩河杏というペンネームで少女小説を書き始め、現代の少女小説の流れをつくった集英社のコバルトシリーズ⁴で1987年から1989年にかけて7冊の作品を発表し、1988年に『お子様ランチ・ロックソース』でコバルト・ノベル大賞を受賞した。その後、角田は少女小説の方向性と自分が書きたかったことが相容れなかったため少女小説の執筆を中止したと述べている（同）。しかし、久米依子が指摘しているように、コバルト時代の角田は、リアルな設定の中で少女が大人びた問題に出会う物語を得意としており（久米 2015: 38）、それが「角田光代」として再デビューして以降の作品に引き継がれていると考えて差し支えなからう。

具体的な個々のテキストへの反映として『対岸の彼女』における少女同士の友情と少女小説との関連を探れば、まず『赤毛のアン』（1908）への言及がある。電話で話す葵とナナコが以下のような会話を交わす。

「ねえアオちゃん、子どものころ『赤毛のアン』ってアニメ見てた？」突然ナナコが言う。

「えー、見てない。でも本は読んだよ」「あのね、ダイアナっているでしょ、アンの美人の友達。アンとそのダイアナんちって、離れてるんだけど向かいあってんの、そんで、電話とかないじゃん、だから夜にふたりはさ、それぞれのランプを持って自分の部屋の窓

4 少女小説とコバルト文庫との関係については、久米依子（2013）や岩淵・菅・久米・長谷川編（2015）を参照。

際に立つの。そんでね、本をランプの
前にかざして、信号を送るの。ぴかっ、
ぴかっ、って明かりが点滅するよう
に」ナナコは静かな声で話す。

「えー、あったっけ、そんな場面」
「本はわかんないけどテレビではやっ
てた。ふたりで窓際で遠くで点滅する
明かりを、お互いずっと見てるの」
「へええ」

葵は言って、黙った。ナナコも黙る。
沈黙が行き交う。明かりをつけていな
い部屋の窓を、葵は見上げる。夜空だ
けが見える。星がいくつも見える。
「あたしたちのうちでも、できればいい
のに。懐中電灯とかで」葵は言う。
「でも今は電話があるじゃん」ナナコ
は言って、笑う。

葵とナナコの会話に突然現れる『赤毛の
アン』の引喩は、『対岸の彼女』における
少女同士の関係を考察する際に重要な意味
を持っている。菅聡子が指摘しているよう
に、『赤毛のアン』は、1952年に翻訳され
てから現在まで日本の少女たちに愛されて
きた作品である。氏は、村岡花子がアンと
ダイアナの関係を「腹心の友」（原作では
“bosom friend”）と訳したことに注目し、本
書における女の子同士の友情について次の
ように述べている。

女の子同士の友情は、少女小説の生命
です。この「腹心の友」の存在こそ、
自分はひとりぼっちで居場所がない、
と感じている少女たちが切望するもの
です。そして、大正以来、繰り返し日

本の少女小説においても描かれてきた
テーマでもありました。（菅 2008: 20）

葵とナナコの会話における『赤毛のアン』への言及はその種の「切望」を表象していると考えられる。アンが初めての友人であるダイアナに「永久にあたしの友達になるって、誓いをたてられて？」と迫ると同様に、葵とナナコは19歳の誕生日に「一生しあわせにすごせるように」と、シルバーの指輪を贈り合う約束を交わす。二人はこの時点では永久に「腹心の友」のままでいられることを決して疑わないのである。このように『赤毛のアン』との間テキスト性を通じて、『対岸の彼女』に少女小説の要素が組み込まれ、少女同士の親密性への欲望が描かれる。

少女同士の絆を考察する際には、物語の空間設定が重要な役割を果たしている点も考慮すべきであろう。とりわけナナコと葵の物語の前半の舞台である女子校および二人の隠れ場所である渡良瀬川に注目したい。二人が通う女子校は葵の視点から次のように語られている。

この学校の生徒たちは選択権がない、だから同じ地点に立っているしかない、というのは、葵も感じていたことだった。そもそも進学校ではなく、学校自体のモットーが設立当時とかわらず未だ「良妻賢母」で、けれど結婚に夢を見られるほど女子生徒たちは前時代的でもない。（中略）高校卒業後ほとんどの生徒が、やりたいことも定まらないまま、しかし働きたくないという

理由だけで専門学校か近隣の短大に進み、同じ顔ぶれでつるみ続け、文句ばかり言い連ねることを覚え、何も学ばないままそこも卒業し、合コンやナンパで知り合った土地の男と結婚していく。

葵とナナコが通う学校の女子生徒たちは前時代的な「良妻賢母」に憧憬しないものの、結婚を前提にする異性愛関係による妻・母という未来像を当然視する。女性が結婚を通じて社会的資源を獲得するという制度が再生されていることから、『対岸の彼女』において女子校は男性ホモソーシャル体制を象徴する場であると推測される。従って、少女同士の関係の意味を探るに当たってはその体制下における友愛を考察する必要がある。

前述したように、友愛のコードは男性支配を確立する手段であり、非性的な公的領域における女同士の関係を認識／表現するための親密性のコードを発達させると男性支配が妨げられかねないのである。よって、男性が友愛コードを独占することによって男性支配的な社会は支えられている。東が指摘しているように、このような社会において、近代以降「女性は男性の親密性欲求を充足させ、男性が同性愛者と疑われることなく男同士の絆を結べるよう、私的領域で男性の異性愛の相手を務めることが求められる」（東 2015: 57）。従って、女同士の間に性的な関係が結ばれる場合は、それは異性愛と並立しえないのであり、女同士のホモセクシュアルな関係が当人にとって第一義的なものとして見なされ

るため禁じられるのである。また、友愛コードが適用される非性的な絆であるとしても、女性にとって女同士の関係は常に副次的な関係である。東が述べているように、「異性愛が女性の最も重視すべきものと位置付けられている社会において、女同士の親密性は、性的と見なされれば異性愛に反逆するものとして迫害を受け、非性的と見なされれば異性愛より劣位に置かれる」（同: 63）。

以上のことを踏まえながら『対岸の彼女』における少女同士の関係を分析すると、女子校という男性ホモソーシャル体制下におかれているゆえに、少女同士間の強い絆が想定され得ないといえよう。女同士の関係を認識／表現するための親密性がコード化されていないため、学校において連帯感が生じず、グループ間のヒエラルキーによるいじめやそれぞれのグループ内の不信感が現れる。また、ナナコと葵の友情も、異性愛によって結婚し、家庭に入り良妻賢母になる前に一時的に許されているだけの関係であり、最初から異性愛関係より劣位になるべく運命づけられているといえよう。しかし、ナナコと葵自身は、このような未来像を拒否し、少女であるがゆえに背負わされている運命から逃れようとしていると考えられる。二人の関係を深める場となっている渡良瀬川は、男性ホモソーシャル体制を象徴する学校の外部にあるゆえに、その体制における規範から逸脱できる空間であるといえよう。

李哲権によれば、彼女らの隠れ場所である渡良瀬川は、家、学校、町という「俗なる空間」から離れた二人だけに許された

「エデンの園」であり、「聖なる空間」である(李 2012: 97)。しかし、この渡良瀬川という空間は東の間の救済しかもたらさない「一時的なエデンの園」に過ぎないのではないだろうか。高校卒業が近づくとつれて二人の関係は脅かされていく。その脅迫から逃れる手段として、葵は町から離れた東京に移動し一緒に大学に進学するという計画を立てるが、最終的に二人は社会秩序を表象する家、学校、町に帰らず横浜へ逃避する。しかしながら、次の引用箇所から理解できるように、その目論見も失敗に終わる。

伊豆を出たときは、どこか遠くにすばらしい未来が待ち受けているような気がしていた。何もかもうまく運んで、ナナコといっしょにそこにたどり着けるのだらうと思っていた。いや、今でも思っている。仕事さえ見つければ、何もかもうまくまわりはじめるのだと。すばらしい未来にたどり着けるのだと。けれど、横浜にきてから、そんなものはどこにもないのではないかと不安になることがある。母の贅沢暮らしの記憶、そんなものがどこにも存在しないように、何もかも思い通りになるすばらしい未来も、ナナコと自分の居場所も、どこにも在り得ないのではないか。

ナナコと葵の逃避行の要因は、ナナコの不幸な家庭事情や学校におけるいじめにあったと推測されるが、以上の引用から窺えるように、それ以外にも理由があったと

考えられる。つまり、家出することによって二人の少女が既成の社会秩序における未来像から逃れようとし、自分たちの友情が脅かされない場所を探し求めているのである。そして、どこに行っても二人の居場所がないことに気づいたあげく自殺を試みる。前述したように女同士の間には非性的な親密な絆が認められていないため、二人の自殺未遂には「異常性愛のちにたどりついた飛び降り心中」というレッテルが貼付けられるが、葵とナナコは男性ホモソーシャル体制が規制する役割から逸脱しようとしただけなのではないだろうか。つまり、公的領域における親密な絆を築き守ろうとしていた二人は男性支配的な社会においてそのような関係が認識されていないことに気づき、死を選ぼうとしたと考えられる。このような展開は実は物語の幕開けから暗示されている。というのも、葵とナナコの密会の隠れ場所である渡良瀬川は、最も早い時期に起きた女同士の心中事件の舞台でもあったからだ。赤枝香奈子が指摘しているように、最も早い時期に女同士の心中事件を扱った新聞記事に、「娘同士の情死」(『読売新聞』1888年2月29日)がある。ここでは、二人の娘(15歳と16歳)の心中が次のように伝えられている。

二人はある機屋に雇われて「姉妹の如く最睦ましく暮」していたが、どういう理由かわからないが、ある晩そこを抜け出して隣町のある家に行き、一泊させてくれるように頼んだ。その主人に戻るよう諭されたところ、「失望の体にて悄然同家を立去りしが二人は

此夜の内に同死を謀りしものと見え
肢^{からだ}体を細帯^{しか}にて確と結び付け互いに抱
き合うたるまま渡良瀬川の泡と消えし
を翌朝土地の者が見付け、となっ
ている。(赤枝 2011: 114)

以上のような背景を踏まえれば、二人が私的に会うことの出来る「渡良瀬川」は、すでに葵とナナコとの女同士の絆が解体の危機にさらされていることを暗示していたといえよう。これは葵とナナコの物語の結末からも読み取ることができる。自殺未遂事件で騒ぎを起こしてしばらく経ってから渡良瀬川で再会した二人は、離れても連絡し合い、19歳の誕生日にプラチナの指輪を贈り合う約束を交わすが、結局それ以来連絡を取ろうとせず、二度と再会せずに二人の物語は幕を閉じる。女同士の友情が副次的な関係として認識されている制度に戻ってしまった葵とナナコは、親密な絆を守ることの不可能性を悟ったといえよう。かつて少女同士の絆が深まる「エデンの園」であったはずの渡良瀬川は、「わたらせ」(る)という名前とは対極的な、「対岸」にいる「彼女」に会うために「渡」ることさえ不可能な「わたらせ」(ない)川、即ち永遠に別れる場所となり、絆の解体の象徴になったと結論づけられるであろう。

Ⅲ. 公的領域におけるママ友の関係

『対岸の彼女』の奇数の章では、大人になった葵と小夜子との関係が語られている。3歳児の母、かつ専業主婦である小夜子は自分の生活に満足できず、育児に関する夫の不協力と義母の愚痴にぶつかりながら

葵が運営する「プラチナ・プラネット」という旅行会社に勤めることを決心する。葵と親しくなりつつも、母・主婦と独身との間にある溝を結局乗り越えることはできないのではないかとがっかりした小夜子は仕事を辞め葵と距離をおく。しかし葵の過去を知ったことをきっかけに小夜子は「プラチナ・プラネット」に戻ると決心し、二人の関係はハッピーエンドを迎える。

小夜子と葵の絆を理解するために、まず小夜子が参加しているママ友コミュニティにおける女同士の関係を分析する必要がある。『森に眠る魚』(2008)において角田光代はママ友同士の絆やそれにまつわる葛藤を事細かに描いたが、『対岸の彼女』においてもママ友コミュニティにおける女同士の関係に焦点が当てられており、女性の絆がいかに制限されているかを追究するためにその分析は欠かせないであろう。

大嶽さと子が指摘しているように、1990年頃はまだ「ママ友」という言葉は使用されていないが、育児ネットワークを捉えた研究が行われはじめた時期である。一般書籍においても「母親が近所の公園に子どもを連れ出して、そこに集まる他の親子連れの仲間入りを果すことが『公園デビュー』と命名」(大嶽 2014: 38)され、母親同士のネットワークが注目されていた。また、1999年11月に子どもの幼稚園受験をめぐる母親同士の関係がこじれ、嫉妬心からその子どもが殺害された事件が発生した。「文京区幼女殺人事件」、あるいは「お受験殺人」として知られているこの事件を契機に主にマスコミや育児雑誌で「ママ友」という言葉が使用されるようになったので

ある⁵。

大嶽が指摘しているように、ママ友に対する考え方は、育児に関する情報交換に基づく関係であり、安心感と楽しさをもたらす関係だとされている（同：39）。しかし一方、ネガティブな側面もっており、中山満子と池田曜子が指摘しているように、「浅い」「うわべ」「ぐち」という否定的な言葉と関連することが多い。また、「教育についての考え方の違いや金銭感覚の違い」によってママ友間に対人葛藤が生じる場合も少なからずある（中山・池田 2014: 285）。

『対岸の彼女』に目を転ずれば、奇数の章は小夜子と娘のあかりの「公園デビュー」の描写で幕が開く。

あかりを産んだのは3年前の2月だった。あかりが生後半年になるころ、小夜子は、乳幼児を持つ母親向けの雑誌を熟読し、その雑誌の指示通りの時間帯に、指示通りの格好をして、住んでいるマンションから一番近い公園にいった。同じくらいの子どものいる母親と幾度か言葉を交わしたし、検診や予防注射の日に待ち合わせて病院にいったりもした。けれど、次第に、その公園では微妙に派閥があることに小夜子は気づきはじめた。ボスの存在がいて、嫌われものとは言わないまでも、さりげなく避けられている母親がいる。30歳を過ぎていた小夜子は、多くの母親たちよりだいぶ年長で、彼女

たちの派閥では「ちょっと異質な人」と見られていることも理解できた。

このように角田はママ友のアンビバレントな関係を簡潔かつ如実に描きだしている。主に育児に関する情報を交換しながら他の母親たちと関係を築きはじめていた小夜子は、その関係のネガティブな側面に直ちに気づく。そのコミュニティには自分の居場所がないことを悟り、小夜子はそこから離れ、公園をぐるぐるめぐる「公園ジプシー」となってしまう。ところが、娘のあかりの保育園の退園の時期が迫るにつれて、幼稚園や定期健診についてアドバイスをもらうために改めてママ友たちと関係を結ぶようになる。つまり、小夜子にとってママ友との関係は、育児に関する情報を得るというポジティブな側面を持っているものの、深い絆へと展開させることが不可能なものである。では、ママ友コミュニティにおいてはなぜ女同士の友情が妨げられているのであろうか。

妙木忍が論じているように、女性の経済力の高低と婚姻上の地位を組み合わせることで、〈負け犬〉と〈勝ち犬〉の四類型が想定される。つまり、〈勝ち勝ち犬〉（有職・既婚）、〈負け勝ち犬〉（無職・既婚、経済的基盤が弱いパート主婦も含む）、〈勝ち負け犬〉（有職・未婚）、〈負け負け犬〉（無職・未婚）、この四類型である（妙木 2009: 219）。〈負け勝ち犬〉である『対岸の彼女』で描かれているママ友

5 都内の文教地区を舞台に1999年の小学校受験を描いている『森に眠る魚』は「お受験殺人」をモチーフにしていると考えられる。

たちにとって、異性愛は社会的資源を獲得する唯一の近道である。つまり、夫の経済力によってしか社会的資源を手に入れることができないのである。〈家庭〉という私的領域における異性愛関係を介して権力に近づくことができる彼女らは、〈妻〉はもちろん、〈母〉としても評価される。〈良い母〉とは子どもの教育に献身することであり、従って子どもを持っていない〈負け犬〉の女性はもちろん、子どもを保育園に預ける職業婦人よりも専業主婦が価値が上とされる。それゆえに公的領域における女同士の絆よりも私的領域における夫および子どもとの絆のほうが重視されている。

以上の考察を角田のテキストと照らし合わせると、葵とナナコの物語において暗示されていた男性ホモソーシャル社会体制下に組み込まれた少女の未来像が、小夜子と他のママ友との関係に具現化されていることが理解できよう。妻・母となったがゆえに女同士の絆が異性愛関係より劣位にあると認識する〈負け勝ち犬〉（つまり、ママ友コミュニティの専業主婦たち）を登場させることで、角田は男性ホモソーシャル体制における女同士の絆の不可能性を照射しているといえよう。

さらに、ママ友を描くことによって、角田が〈勝ち犬〉内に存在する対立も炙り出している。妙木が指摘しているように、夫の地位に連動して自身の地位が決定される〈負け勝ち犬〉とは対照的に、自分の価値観を優先する〈勝ち勝ち犬〉にとって、「仕事を持っておりかつ『結婚している状態』が新たな価値基準になってきている」（妙木 2009: 220、強調原文）。言い換えれば、

夫や子どもがいて女性も仕事を持っているのではなく、女性が仕事を持った上で夫や子どももいるという、優先順位が仕事に置かれているのである。『対岸の彼女』において、「自分は社会に出るんだって、へんな自信持ってる」と、働く母親たちをバッシングする〈負け勝ち犬〉を描くことによって、女同士の友情を妨げている社会的機構が暴露されたといえよう。酒井順子が述べているように、家庭内に〈子ども〉を生産する女性と経済社会で〈お金〉を生産する女性は、「相手に欠けている部分を見つけては、お互いに『不完全』だと言いつつ」（酒井 2006: 11-2）。その結果、女同士の間にある溝が深まっていくのである。角田はその過程を描くことで、〈勝ち犬〉対〈負け犬〉、あるいは〈勝ち犬〉内の葛藤の土壌を明らかにしたといえよう。そしてそれにとどまらず、小夜子と葵の物語を通じてその葛藤を乗り越える道を提示したと考えられる。次節では、〈負け犬〉対〈勝ち犬〉の関係を中心にその可能性について考察を試みる。

IV. 『対岸の彼女』における女同士の絆の可能性

角田がインタビューで述べているように、『対岸の彼女』を書くきっかけは、「専業主婦と働く主婦のバトル」を目撃したことにある（角田 2011: 123）。また、同時期に〈勝ち犬〉と〈負け犬〉の対立を綴った酒井順子の『負け犬の遠吠え』（2003）が世間の注目を集めたことによって『対岸の彼女』も脚光を浴びた、と角田が主張している（角田 2011: 123）。さらに、『対岸の彼

女』を書いた意図について次のように述べている。

結婚していて子どもがいない。子どもがいて仕事もしている。子どももいないのに専業主婦である。結婚もしておらずする予定もない。そういう情報は、あるタイプの女性にとっては分けラベルなのである。そしてラベルをつけて分けし、自分の立ち位置というものを理解する。自分の立ち位置が理解できると、その立ち位置の正当性のために、優劣をつける。(中略)『対岸の彼女』を書こうと思ったきっかけは、そんなところにある。一昔前は、同じ制服を着て、机を並べて、帰りにケーキを食べるかお汁粉を食べるかで延々話されていた女同士が、社会に出て数年すると、相手の立場を分けせずしては容易に話もできなくなる。立場のまったく違う女が、立場を越えて親しくなれるのか、否か。(角田 2008: 203-5)。

前述したように、『対岸の彼女』と同時期に同じ主題を扱う酒井順子の『負け犬の遠吠え』が注目を浴びたことを『対岸の彼女』の成功と関連づけているとみられる。妙木が指摘しているように、『負け犬の遠吠え』では「一人であるのもすばらしいんだ」というスタンスを避け、「私は負けています」という立場を奨励することによって、酒井が既婚か未婚かで女性に勝敗をつける社会を批判しつつ、「そのような勝負から自ら降りてしまおうという戦略」を提示してい

る(妙木 2009: 207)。では、葵と小夜子の物語においては、どのように<負け犬>論争が超越されているのであろうか。また、どのように女同士の絆の可能性が提示されるのであろうか。

既に述べたように、男性ホモソーシャル体制によって支持されている社会において公的領域における女同士の絆よりも私的領域における夫および子どもとの絆のほうが重視されている。小夜子はその規範を内面化した人物として描かれている。彼女は専業主婦の生活に疑問を抱きつつも、仕事に就いても自身の妻・母としての役割を棄てず、「どんなに忙しくても家のなかのことはきちんとしよう」と決め、私的領域における女性としての義務を決して忘れない。また、夫や義母から追いつめられ、妻・母の役割を強いられながらも小夜子は仕事を続け、葵との関係をもってジェンダー規範に反した公的領域における女同士の絆を築こうとする。しかし、未婚、子ナシの葵との間の溝が深まるにつれ、小夜子は自分の決意に疑問を持ちはじめ、ついに仕事を辞め葵との関係をも絶つ。

葵と小夜子は初めて会った時、同じ大学を卒業している共通点から親しくなるが、「見ているものも、欲していることも、目指しているその先も」根本的に異なることに気づいた小夜子の思いが次のように語られている。

この人は、自分と違う立場の人間がいるってことを本当にわからない。小夜子はさなりと思う。みんな違う、違うから出会いに意味があると、大上段に

構えて言っていたくせに。家庭の主婦が、連絡も入れず外泊することがどんな意味を持つのか、連絡を入れたとしても、今の状況ならどんな厄介ごとに発展するか、ちなりとでも考えることができないんだろうか。

このように、葵と小夜子との関係の切断においては、〈負け犬〉（＝結婚していない女）と〈勝ち犬〉（＝結婚して子どもを生んでいる女）との対峙を見てとることができよう。言い換えれば、その切断は公的領域と私的領域のどちらを優先するかの違いをもつ女同士の間にある溝によるものではないであろうか。男性支配の社会の規範を内面化した小夜子は妻・母の役割から逸脱することができず、公的領域において他の女性との関係を築こうとしたが、最終的に異性愛関係を重視し私的領域に戻る。一方、公的領域において立場を置こうとする葵は、私的領域にまつわる役割を逸脱したが、ジェンダー規範に反逆したがゆえに、その規範を受け入れる女性との関係をうまく築くことができない。なぜなら、前述したように、異性愛社会において女同士の親密性は、性的と見なされた場合には異性愛に反逆するものとして迫害を受け、非性的と見なされた場合は異性愛より劣位におかれるからである。葵の場合は、過去の自殺未遂事件は同性愛同士の心中として解釈されたゆえに、彼女が結ぼうとする親密な関係は周りの人から性的な関係と見なされ、異常というラベルが貼られる。一方、非性的な関係を築こうとするときは、相手は異性愛を優先し、妻・母としての役割の方を

重視するのである。このように葵と小夜子の物語において〈負け犬〉と〈勝ち犬〉の差異に焦点を絞ることによって女同士の絆の構築を妨げる要素が明確にされている。

しかし、『負け犬の遠吠え』と対照的に『対岸の彼女』では、女同士の対峙のみならず、〈負け犬〉と〈勝ち犬〉の同質性も描かれている。葵とナナコの「異常性愛」が騒がれた当時、小夜子は二人の関係に興味を覚え、その関係の行方について考えずにはいられなかった。即ち、葵とナナコの「心中事件」が小夜子に女同士の絆を問うきっかけを与えていたのである。長い間二人の少女の友情物語に憧れながら依然としてあまり友達を作ることができなかった記憶が蘇る小夜子は、葵との関係を通じて自分がひとりぼっちで居場所がないと悩んでいた過去を克服しようとしたと考えられる。さらに、「檜橋さんといっしょだと、なんだかなんでもできそうな気がする」と言う小夜子が、かつて葵がナナコに向かって言っていた言葉を意図せずに繰り返していることから、二人とも同じ目的を共有し協調できる女同士の絆に憧憬していると理解できよう。

また、小夜子との初対面から高校生の時の自分を思い出しながら記憶のなかのナナコを演じているように錯覚する葵も、小夜子との関係の中で差異を認めつつ同じ目的に向かって歩むべく同質性を見出していることを以下の引用箇所から窺える。

小夜子とは年齢と出身校以外、立場ももの見方も、持っているものもないものも何もかも違った。正直、葵に

とって、小夜子の言う「家庭」も「子ども」も「保育園」も、暗号のように遠く思えた。けれど自分たちは、おんなじ丘をあがっているような気がしてならなかった。まったく別のルートから、がむしゃらに足を急がせたり、ときどき座って休んだり、歩くこと自体にうんざりしたりしながら、なだらかな傾斜をあがっている。立場も違う、ものの見方も、持っているものもないものも違うが、いつか同じ丘の上で、着いた着いたと手を合わせ笑い合うような、そんな気が漠然とした。

このように小夜子も葵も少女時代に切望しながらも保てなかった友情を求め続けているといえよう。葵と小夜子の関係において葵とナナコの間を反復させながら「負け犬」と「勝ち犬」間における差異と同質性を同時に描くことによって、作者は少女たちの友情の不可能性から女同士の絆の可能性へと物語を展開させるのである。

さらに、結末において「負け犬」論争の超越も提示されている。しばらく専業主婦の生活に戻り、働く母親をバッシングするママ友と関係を結んだ小夜子が、ある日一人で会社を営むことになった葵と共に再び仕事することを決める。その決心の背景にはあかりの運動会の際に葵が撮っていた動画に残された子どもたちの映像がある。

そのときカメラは、転んだ男の子を大写しにした。少し先を走っていた男の子がふりかえり、ゴールを目指すべきか、後戻りするべきか、ちいさな足を

もじもじさせながら思い悩み、弾かれたように転んだ子のところへ駆け出した。歓声が上がると。男の子は地面にうつぶせになって、泣きわめく男の子をなだめている。なだめ、手を引き、立ち上がらせ、ゴールを目指してゆるゆると二人で歩きはじめる。

この場面において動画を撮っていた葵の眼差しとその映像を見る小夜子の眼差しが重複し、葵と違う視点をもちながらも目の前に同じ光景が見られることを小夜子が悟る。それゆえに、葵とナナコのように「別の場所いき、全く異なるものを見て、かわってしまったであろう相手に連絡をとるのがこわが」らず、同じ目的に向けて共に歩むことを選択するようになるのである。ナナコとの別れ際に「大人になれば自分で何かを選べるようになる？ 大切だと思う人を失うことなく、いきたいと思う方向に、まっすぐ足を踏み出せるの？」と、少女の葵が自問していた。その言葉が「負け犬」と「勝ち犬」間の差異を乗り越え葵と同じゴールを目指すようになった小夜子の言葉に反復され、そこに葵の問いへの答えが提示される。

なぜ私たちは年齢を重ねるのか。生活に逃げこんでドアを閉めるためじゃない、また出会うためだ。出会うことを選ぶためだ。選んだ場所に自分の足で歩いていくためだ。

葵とナナコの過去を雑誌の中で読んでいた小夜子にとって女同士の友情は幻想的な

物語であり、現実に存在し得ないものであった。葵と出会って以降も、小夜子は葵と共に未来を見ることができず、葵を観察しその過去を読み続け、誤読していた。というのは、女同士の友情がコード化されていない男性支配的な社会における規範を内面化し、私的領域における女性の役割を受け入れていた小夜子にとって同性との関係は副次的なものであったからだ。妻・母の役割を自明のように考えていた小夜子が葵と同じ方に向かえず、傍らから彼女を見る以外に方法がなかったのである。しかし、運動会の映像の中で葵が見られる存在から見る存在へと変わり、立場が違うものの二人の目の前にある景色が同じであることに小夜子が気づく。

以上のように映像に映っている子どもたちと同様に、競争相手と肩を並べることを選んではじめて女同士の友情物語が可能になることが明らかにされている。妙木が指摘しているように、〈負け犬〉論争は「女性が置かれた位置を女性自身に考えさせるきっかけを与えた」（妙木 2009: 238）。『対岸の彼女』のハッピーエンドも男性支配的な社会における女性の立場を考え直すきっかけを与え、公的領域における女同士の関係の可能性を提示しているといえるのではないであろうか。

なお、『対岸の彼女』の結末において再度「渡良瀬川」が登場するが、以下の引用箇所からも窺えるように、女同士の間にある差異を乗り越える可能性を象徴するものへと変質しているといえよう。

小夜子は手紙から顔を上げた。

見たことのない景色が、実際の記憶のように色鮮やかに浮かんだ。

川沿いの道。生い茂る夏草。制服の裾をひるがえし、陽の光に髪を輝かせ、何がおかしいのか腰を折って笑い転げながら、川向こうを歩いていく二人の高校生。彼女たちは手をふりながら、何か言っている。小夜子も手をふりかえす。何か言う。なーに一、聞こえなーい。二人は飛び跳ねながら少し先を指さす。指の先を目で追うと、川に架かる橋がある。二人の女子高生は小夜子に手招きし、橋に向かって走り出す。対岸の彼女たちを追うように、橋を目指し小夜子も制服の裾を踊らせて走る。

以上のように、与えられた役割を果たすだけの場所にとどまらず、橋を目指し立ちたい場所に向かう小夜子はもはや対岸から少女たちを眺める女同士の友情物語の読者ではなく、同じ道を歩む主人公となったといえよう。少女同士の「聖なる空間」、そして別れの場所であった「渡良瀬川」は、結末において女同士の繋がらないし出会いを象徴する場所が変わったのである。その意味合いは「渡良瀬川」の命名の由来にも暗示されている。伝承によると、日光を開山した勝道上人による命名であり、勝道上人が川を渡ろうとしたところ、渡るのにちょうど良い浅瀬があったためその場所を渡良瀬と名づけたという（日本博学倶楽部 2007: 393）。このように考えると、『対岸の彼女』の結末に改めて「渡良瀬川」が登場させることによって、作者が〈負け犬〉と

〈勝ち犬〉の対峙を乗り越えるために、男性ホモソーシャル体制の中で「ちょうど良い浅瀬」、つまり女同士の絆が構築できる制度の隙間を探り求める必要があると、訴えているといえよう。

V. おわりに

男性のホモソーシャル関係を中心とする現代社会において、男同士の友情は強く美しいとされるのに対し、女同士の友情は弱い絆、異性愛関係の片手間に結ばれる絆としてみなされることがしばしばある。なぜなら、女性が友愛のコードを学ぶための女性を対象にした友情物語が少ない上に、女性は同性との関係より異性愛関係が上位にあると見なすように教え込まれるからだ。その結果、女性は同性との強い親密性を実感することができず、女性同士の友情は常に一時的かつ副次的な関係として認識される。このような「弱い絆」の代表的な例としてママ友コミュニティにおける女同士の関係が挙げられる。『対岸の彼女』においていわゆる〈負け勝ち犬〉（無職・既婚女性）として描かれているゆえに、ママ友たちは夫の経済力によってしか社会的資源を手に入れることができないのであり、異性愛関係を通じて評価されている。その評価基準は家族に尽くす〈良い妻〉であることはもちろん、〈良い母〉であることも非常に重要である。それゆえに社会における立場、またその立場にまつわる同性との関係をも自ら選ぶことができることに気づかないまま、小夜子のママ友たちが私的領域における夫および子どもとの絆を重視し、公的領域における女同士の絆を副次的なもの

として見続けるのである。

制度によって強いられているその副次性を避けるために女性たちにはいかなる選択肢が残されているのであろうか？『対岸の彼女』の少女たちは家出し、自殺を試みる。〈家出〉と〈自殺〉の両方の行為が男性ホモソーシャル体制において定まっている役割からの逃避を意味していると考えられる。つまり、家出をもって妻・母の未来像から逃れようとしたナナコと葵が公的領域において女性同士が絆を結ぶことが許容されていないことを予想し、死を選ぼうとしたのである。その目論見が失敗に終わったゆえに、自分たちの関係が副次的なものにならないよう葵とナナコは関係を絶つ道を選んだといえよう。

一方、小夜子と葵との関係をもって女同士の絆の物語のもう一つの結末が提示されている。社会に出る決心をすることで、小夜子は夫の経済力によってしか社会的資源を手に入れることができない妻・母という役割を降りようとしていると考えられる。そうすることで、新たな価値基準を持つようになる。即ち、物語の前半で見られる「夫や子どもがいて仕事を持っている女性」から、後半においては「仕事を持った上で夫や子どももいる女性」へと変容していくのである。その変化が女同士の絆の可能性を生み出すといえよう。つまり、男性が覇権を握る社会において、女性に与えられた役割から解放されることによって同性との強い絆を結ぶことが可能になるのだ。その絆は、共通の目標を持つことによって結びついていると考えられる。浅野智彦は、「親しい関係を超えて、その問題の解決に利害や

関心をもつという以外の共通点が必ずしもない人々の間に協力関係を組織していくようなつきあい方の作法」を「公共性」と呼んでいる（浅野 2011: 10-1）。一人で会社を営むことになった葵と再びそこで仕事することを決心した小夜子の間にある親密な絆は、共に「プラチナ・プラネット」を営みながら選んだ場所に自分の足で歩き、社会における自分の居場所を手に入れるという共通の目標によって結びついている点において、浅野がいうような公共性を帯びていると見なせるであろう。

強制的異性愛を伴う男性ホモソーシャル体制において「セクシュアルな存在」である女性にとって他の女性は男性の愛を争う競争相手でしかありえず、「女性が女性の敵である」「女同士の絆が弱い」という概念は根深い。このような体制を背景にしなが、『対岸の彼女』では角田光代がその制度の隙間に潜んでいる女性のホモソーシャルリティ（つまり、同性間の非性的な親密性）の可能性を明らかにした。竹村和子によれば、「個々の具体的な状況に置かれている女たちが、その文脈のなかで、なかば必然的に歩み寄るとき、その結びつきは——差異を横断することの困難さのためにつねに解体の危機にさらされながらも——生き延びる可能性を秘めた絆となる」（竹村 1999: 302-3）。男のホモソーシャルな欲望と異なり、女同士の絆は、「制度によって否定され、制度の隙間で構築される個別的で私的な出来事」（同）である。

おそらくそれは、「目のまえの目的」を共有するときに訪れる、きわめて個別

的で、私的な出来事——具体的な差異を横断しつつ、常に差異によって解体の危機にさらされる一瞬、一瞬の出会い——個人的な強烈な親和力なしには持ちこたえられない体験——なのではないか。（中略）「ホモソーシャル」という語から、社会制度という含意を抜き取り、「今、共にいること」という本来の意味だけ取り出せば、このような女の絆はまさにホモソーシャルであり、それを支えているのは、「欲望」という強烈な内的親和力だといえよう。（同: 310-1）

竹村に倣って「ソーシャル」という語が含意する「今、共にいること」という意味を取り出し、このような絆を「ホモソーシャル」と定義するなら、＜負け犬＞と＜勝ち犬＞との間にある差異を横断する困難さを乗り越え、共に働きながら目の前の目的を共有する葵と小夜子の間にある絆もホモソーシャルな関係であるといえよう。

本稿で論じてきたように、角田光代は『対岸の彼女』において葵とナナコと葵と小夜子、それぞれの物語を通じて男性ホモソーシャル体制によって支持されている制度によって、女同士の絆がいかに制限されているかを炙り出している。また、本書における女同士の関係は、相手と親しくしたいという互いの感情に基づく葵とナナコの物語から、共通の目標によって結束している＜公共性＞を描く葵と小夜子の物語へと変わっていく。このように、『対岸の彼女』において制度の隙間における「私的な出来事」に潜む女同士のホモソーシャルな絆が

可視化され、作者が女性間の友情物語を提
供することで女性読者に友愛コードに習熟
するきっかけを与えていると結論づけられ
るであろう。

付記

本文引用は『対岸の彼女』（文春文庫、2007年）に拠る。

参考文献

- 赤枝香奈子, 2011, 『近代日本における女同士の親密な関係』角川学芸出版。
- 浅野智彦, 2011, 『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店。
- 東園子, 2015, 『宝塚・やおい、愛の読み替え 女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社。
- Chambers, Deborah, 2006, *New Social Ties: Contemporary Connections in a Fragmented Society*, London, Palgrave Macmillan UK (辻大介・東園子・久保田裕之・藤田智博訳, 2015, 『友情化する社会——断片化のなかの新たな「つながり」』岩波書店)。
- 池田曜子・中山満子, 2014, 「ママ友関係における対人葛藤経験とパーソナリティ特性との関連性」『パーソナリティ研究』第3号: pp. 285-8。
- 岩淵宏子・菅聡子・久米依子・長谷川啓編, 2015, 『少女小説事典』東京堂出版。
- 角田光代, 2004, 『対岸の彼女』文藝春秋。
- , 2005, 「自筆年譜&アルバム」『文藝』春季号: pp. 56-9。
- , 2007, 『八日目の蟬』中央公論新社。
- , 2008, 『何も持たず存在するということ』幻戯書房。
- , 2008, 『森に眠る魚』双葉社。
- , 2011, 「部屋と小説と私たち——20年の歩みとその行方」『ユリイカ』5月号: pp. 114-25。
- 菅聡子, 2008, 「〈少女小説〉の歴史をふりかえる」菅聡子編『〈少女小説〉ワンダーランド——明治から平成まで』明治書院。
- 久米依子, 2013, 『「少女小説」の生成 ジェンダー・ポリティクスの世紀』青弓社。
- Montgomery, Lucy Maud, 1908, *Anne of Green Gables*, Boston, L.C. Page & Co. (村岡花子訳, 1952, 『赤毛のアン』三笠書房)。
- 妙木忍, 2009, 『女性同士の争いはなぜ起こるのか 主婦論争の誕生と終焉』青土社。
- 日本博学倶楽部編, 2007, 『日本の地名の意外な由来』PHP研究所。
- 大杉重男, 2011, 「対岸の80年代 角田光代論」『ユリイカ』5月号: pp. 143-7。
- 大嶽さと子, 2014, 「『ママ友』関係に関する研究の概観」『名古屋女子大学紀要 家政・自然編, 人文・社会編』(名古屋女子大学) 第60号: pp. 37-43。
- 李哲権, 2013, 「固有有名の詩学が織りなすテキスト——角田光代の『対岸の彼女』を読む——」現代女性作家読本刊行会編『現代女性作家読本⑮』鼎書房。
- Rich, Adrienne, 1986, "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence," In *Blood, Bread, and Poetry: Selected Prose 1979-1985*, New York, W.W. Norton & Company, Inc. (大島かおり訳, 1989, 「強制的異性愛とレズビアン存在」『アドリエンヌ・リッチ女性論 血、パン、詩。』晶文社)。
- 酒井順子, 2006, 『負け犬の遠吠え』講談社文庫。
- Sedgwick, Eve Kosofsky, 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York, Columbia University Press. (上原早苗・亀澤美由紀訳, 2001, 『男同士の絆——イギリス文学

- とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会).
- 竹村和子, 1999, 「〈悪魔のような女〉の政治学——女の「ホモソーシャルな欲望」のまなざし」海老根静江・竹村和子編『女というイデオロギー——アメリカ文学を検証する』南雲堂.
- 上野千鶴子, 2010, 『女ざらい——日本のミソジニー』紀伊國屋書店.
- 矢澤美佐紀, 2007, 「『労働』と女性文学——佐多稲子・角田光代・絲山秋子を手がかりに」『社会文学』(日本社会部学会) 第25号 : pp. 11-23.

(掲載決定日 : 2019年5月29日)

Abstract

Stories of Female Friendship in a Male-dominated Society: Female Bonds in Kakuta Mitsuyo's *Woman on the Other Shore*

Letizia Guarini

Female friendship is often regarded as temporary and fragile. In particular, because a homosocial bond (an intimate same-sex relationship that is neither romantic nor sexual) is usually identified in terms of male bonding, friendship among women has been largely invisible and considered impossible. Thus, compared with stories of male friendship, stories of friendship between women are rare.

In Japanese contemporary literature, Kakuta Mitsuyo explored the possibilities of female bonds in her fiction. In *Woman on the Other Shore* (2004), she portrayed the possibilities of female friendship through two stories: the plot develops as it alternates between the narration of Sayoko and Aoi's friendship and that of Aoi's past and her friendship with Nanako during high school. Focusing on these alternating narrations, I analyze the friendships between (1) young girls, (2) *mamatomo* (mom friends), and (3) the women characterized as *makeinu* (loser dogs) and *kachiinu* (winner dogs). This paper seeks to investigate how female bonding is controlled within a system structured upon homosocial bonds exclusive to men and to identify the possibilities of female friendship within this system as depicted in Kakuta Mitsuyo's text.

Keywords

Kakuta Mitsuyo, female friendship, intimacy, homosocial bond, *Woman on the Other Shore*